

— ENVIRONMENT DIAGNOSIS REPORT

コミュニティルーム 環境診断レポート

Kindergarten — Community Room Renewal

☑—STUDIO | Environment Design | 2025

はじめに

環境は、語らずして語る。

その部屋に一步入った瞬間、人はすでに何かを感じ取っている。

本レポートは、幼稚園における「コミュニティルーム」を対象とした環境診断の記録である。

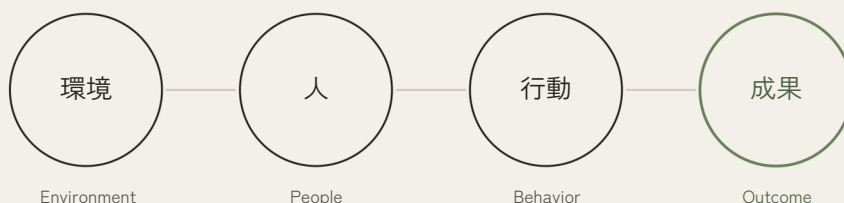
職員の休憩と打合せ、保護者との面談、地域住民との交流。ひとつの部屋に求められる役割は、この十年で確実に増えている。にもかかわらず、多くの園において、この場所は「余った空間」「後回しにされる部屋」として扱われてきた。

私たちは、この部屋を単なる改装の対象としてではなく、園という組織の状態を映し出す環境として読み解くことから、プロジェクトを始めた。

目的	コミュニティルームの現状を客観的に把握し、改修の方向性を「感覚」ではなく「構造」として定義すること。
対象範囲	幼稚園 コミュニティルーム（職員・保護者・地域共用スペース）
本書の性質	環境診断報告書 兼 計画提案書。ヒアリング・現況分析・計画・実施ロードマップを一体で扱う。

環境が、人を変える。

人を変えるのではなく、人が生きる環境を設計する。



私たちは建築会社ではない。人が生きる環境を設計する会社である。

内装が古い、動線が悪い、収納が足りない——こうした指摘は表面的な症状にすぎない。本質的な問いは「この環境は、そこで働き、集う人々の行動をどう方向づけているか」である。

環境が変われば、人の行動が変わる。行動が変われば、組織の状態が変わる。幼稚園コミュニティルームの診断も、この前提に立って行った。

環境診断という、 最初の一步。

多くの改修計画は「何を置くか」から始まる。私たちは「何が起きているか」から始める。

環境診断とは、空間を測ることではない。その空間の中で、人がどう動き、どこで滞留し、どこを避けているかを観察し、構造として言語化する作業である。

01

ヒアリング

園長・職員・保護者へのヒアリングを通じ、言葉になっている課題と、まだ言葉になっていない違和感の両方を拾う。

02

行動観察

実際の利用時間帯における滞在・移動・会話の発生箇所を記録し、空間と行動のズレを可視化する。

03

動線分析

出入口・什器配置・視線の抜けを図面上に重ね、動線同士の衝突や滞留点を特定する。

04

空間評価・可視化

光・収納・視線・居場所など複数軸でスコア化し、課題の優先順位と改善余地を数値と図で示す。

この4つの工程を経て、本レポート後半の「計画（Planning）」が導かれている。設計は診断の結論であり、出発点ではない。

施設概要

施設名	幼稚園
対象諸室	コミュニティルーム（職員ワークスペース／保護者面談／地域交流を兼ねる多目的室）
室面積	約 76.8 m ² （8,530mm × 9,000mm、L字形平面）
調査期間	2025年 夏（現地調査・ヒアリング・図面診断）
調査方法	職員・保護者ヒアリング／時間帯別行動観察／動線・採光分析／既存図面照合
対象者	職員（常勤・非常勤）／保護者／地域住民（開放行事利用者）
診断担当	☑一STUDIO（palisa LLC）

この部屋は、ひとつの用途を持たない。
だからこそ、設計されないまま今日を迎えた。

コミュニティルームは、職員会議・事務作業・保護者面談・地域向け行事準備など、性質の異なる複数の機能を一室で担っている。単機能の教室と異なり、「多目的」という言葉のもとに、ゾーニングの検討が先送りにされてきた典型的な空間である。

本診断では、この複合的な機能を前提としたうえで、それぞれの機能がどこで衝突し、どこで補完し合えるかを分析した。

現状分析

改修前のコミュニティルームは、単一の什器配置で複数機能を兼用する構成となっていた。壁沿いの造作カウンターが事務・食事・面談を兼ね、収納は不足し、来訪者と職員の動線が明確に分かれていない。



Fig. 01 既存室 概念図（ゾーニング未整理の状態）— 実測図面をもとに作成

この図が示すのは「悪い間取り」ではない。間取りそのものは、L字形の素直な矩形であり、構造的な制約は少ない。問題は、機能ごとの境界が一度も引かれてこなかったという、計画の不在にある。

観察から見えた、 3つの兆候。

01 | 職員が「通り道」に座っている

来訪者動線と職員の作業席が重なり、常に人の往来を背にして事務作業を行う状態が常態化していた。集中を要する作業が、最も落ち着かない場所で行われている。

02 | 面談も雑談も、同じ場所で起きる

保護者面談のような込み入った会話と、日常的な雑談が、同一のテーブルで行われる。空間が用途を区別しないため、利用者自身が場の空気を都度読む負担を強いられている。

03 | 「ここにいていい」と思える場所がない

腰を落ち着けられる居場所（ラウンジ的な滞在ポイント）が存在せず、部屋の滞在時間はどの利用者においても短い傾向が確認された。

| *"A room without zones asks every visitor to guess what it's for."*

環境分析

7つの軸から、部屋の状態を構造的に読み解く。

光	<i>Light</i>	開口部は室の長辺一面に集中しており、時間帯によって奥行き方向に明暗差が大きい。ロールスクリーンは未計画で、西日対策が個々の判断に委ねられていた。
動線	<i>Flow</i>	出入口が室の一角に集中し、来訪者は必ず職員作業エリアを横断する。動線が一本化されているため、来訪と作業が常に交錯する。

光と動線は、空間の「性格」を決める最初の2軸である。

光は部屋の時間の流れをつくり、動線は部屋の緊張感をつくる。まこと幼稚園コミュニティルームでは、この2軸がともに「未整理」の状態にあり、利用者が無意識に感じる落ち着きのなさの主因になっていた。

収納と視線

収納	<i>Storage</i>	壁面収納が存在せず、書類・備品は床置きまたはカウンター下に分散。表に見える収納の不足は、片付けを諦めさせ、雑然とした印象を固定化させる。
視線	<i>Sightline</i>	入口から室奥まで視線が一直線に抜ける構成自体は開放的だが、遮るものが一切ないため、面談中の会話も含めて全てが見渡せてしまう。開放感とプライバシーが両立していない。

Observation

収納不足は「片付け不足」ではなく、収納計画の不在という設計課題である。

Observation

「見える」と「見られすぎる」は違う。視線の抜けには、選択的な遮蔽が必要。

コミュニケーションと集中

対話	<i>Communication</i>	中央の長机は、対話の発生装置として機能している点は評価できる。一方で椅子の種類・色がまちまちで、「誰の場所でもない」印象を与え、着席の心理的ハードルを上げていた。
集中	<i>Focus</i>	事務作業の席が出入口の真横にあり、来訪の都度、作業が中断される。集中を要する業務のための「奥まった場所」が室内に一つも存在しない。

対話と集中は、一見相反する要求に見える。しかし実際には「ゾーンが分かれていれば両立できる」という、単純だが見落とされがちな設計原則に基づいている。まこと幼稚園の課題は、対話が悪いのではなく、対話と集中が同じ場所に押し込まれていたことにある。

居場所

居場所	<i>Identity / Belonging</i>	腰を落ち着けられる場所的な「アンカー」が存在しない。什器はすべて作業用途で占められ、意図的に「何もしなくていい場所」が設計された形跡がなかった。
-----	-----------------------------	--

居場所とは、機能ではなく、感覚である。

職員が「ここにいたい」と感じる場所、保護者が「また来たい」と感じる場所は、什器の性能では説明できない。それは、素材・光・音・余白が重なって生まれる、言語化しづらい感覚である。

今回の診断で最後に確認したのは、この部屋に、そうした感覚を生む「余白」が一切設計されていなかったという事実だった。

7つの軸（光・動線・収納・視線・対話・集中・居場所）の分析は、次章「課題整理」および「Environment Score」で統合し、優先順位を持った計画へと接続する。

課題整理

分析から抽出された課題を、優先度とともに整理する。

ゾーニングの不在

優先度 高

事務・面談・交流・収納の機能が単一空間に混在。動線分析および対話・集中の両評価に影響する、最上位の構造課題。

収納の未計画

優先度 高

壁面収納の不在により、備品・書類が床置き化。視覚的な乱雑さと、片付けへの心理的抵抗を同時に生んでいる。

視線コントロールの欠如

優先度 中

面談時のプライバシー確保が困難。開放性を保ったまま、選択的に視線を遮る計画が必要。

什器言語の不統一

優先度 中

椅子・机の素材や色に統一感がなく、空間としての一体感、および帰属意識の醸成を妨げている。

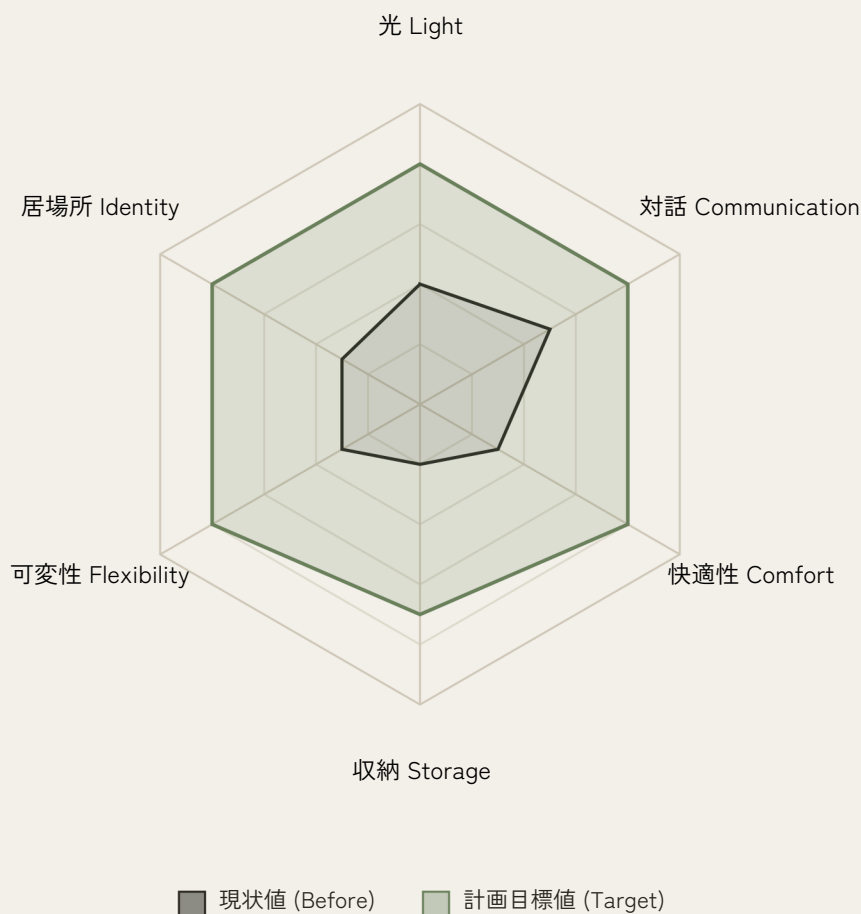
滞在を促す居場所の不在

優先度 低

構造的課題の解消後、次段階として着手すべき「居心地」の設計。単独では改善効果が限定的なため優先度を中～低に設定。

環境スコア

6軸による現状評価と、計画後の到達目標値。□一STUDIO独自指標。



スコアは10点満点。ヒアリング・行動観察・図面分析の結果を、□一STUDIOの評価基準に基づき算出。「快適性」「可変性」は現状評価が特に低く、計画において最も改善余地の大きい軸となった。

Concept

クリーン & クラシカル

診断が示したのは、機能の混在という構造課題であると同時に、「この部屋にふさわしい性格」がまだ定義されていないという事実だった。

幼稚園が積み重ねてきた時間、職員と保護者の間にある信頼、地域に根づいてきた歴史。これらは、真新しい素材では表現できない。私たちは、経年変化を前提とした木・革・鉄という素材の組み合わせによって、「使い込まれることで美しくなる部屋」を計画コンセプトとした。

クリーン&クラシカルは、懐古的な装飾ではない。時間の蓄積を肯定する、機能的な選択である。

参照イメージ | Reference



Fig. 02 タイル柱・チェッカー床・張り地ベンチ — 素材の対比による陰影のある居場所



Fig. 03 木部と什器のトーン統一



Fig. 04 スチールフレームによる軽やかな抜け感

参照イメージは意匠の模倣を目的としたものではない。素材の組み合わせ方、光の受け止め方、什器と身体の距離感といった「関係性」を抽出し、まこと幼稚園の空間条件に翻訳するための思考の補助線である。

ゾーニング計画

4つの機能ゾーンを再定義し、動線と役割を明確化する。

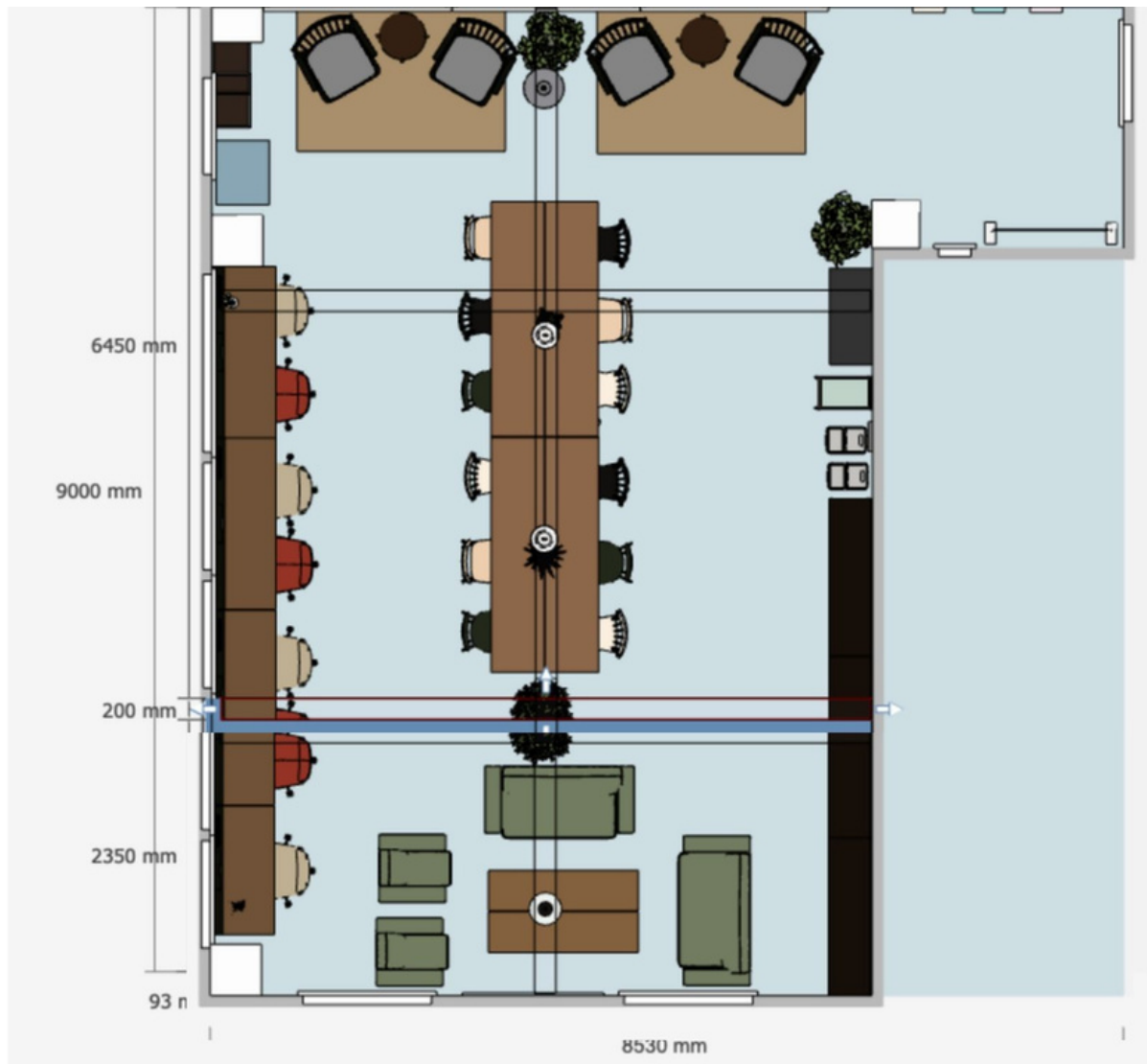


Fig. 05 Plan A —ゾーニング計画図 (8,530mm × 9,000mm)

01 受付・面談ラウンジ

入口正面。来訪者が最初に接する、対面型の小さな応接ゾーン。

02 共有ワークテーブル

室の中心軸。職員の事務作業と、日常的な対話を同時に受け止める帯状ゾーン。

03 収納壁

室の東側全長に配置する造作ロッカー。備品を面から消し、視覚的にSTUDIOを確保する。

04 ラウンジ

室の最奥。ソファとアームチェアによる、機能を持たない滞在のための居場所。
Plan 111

寸法と動線

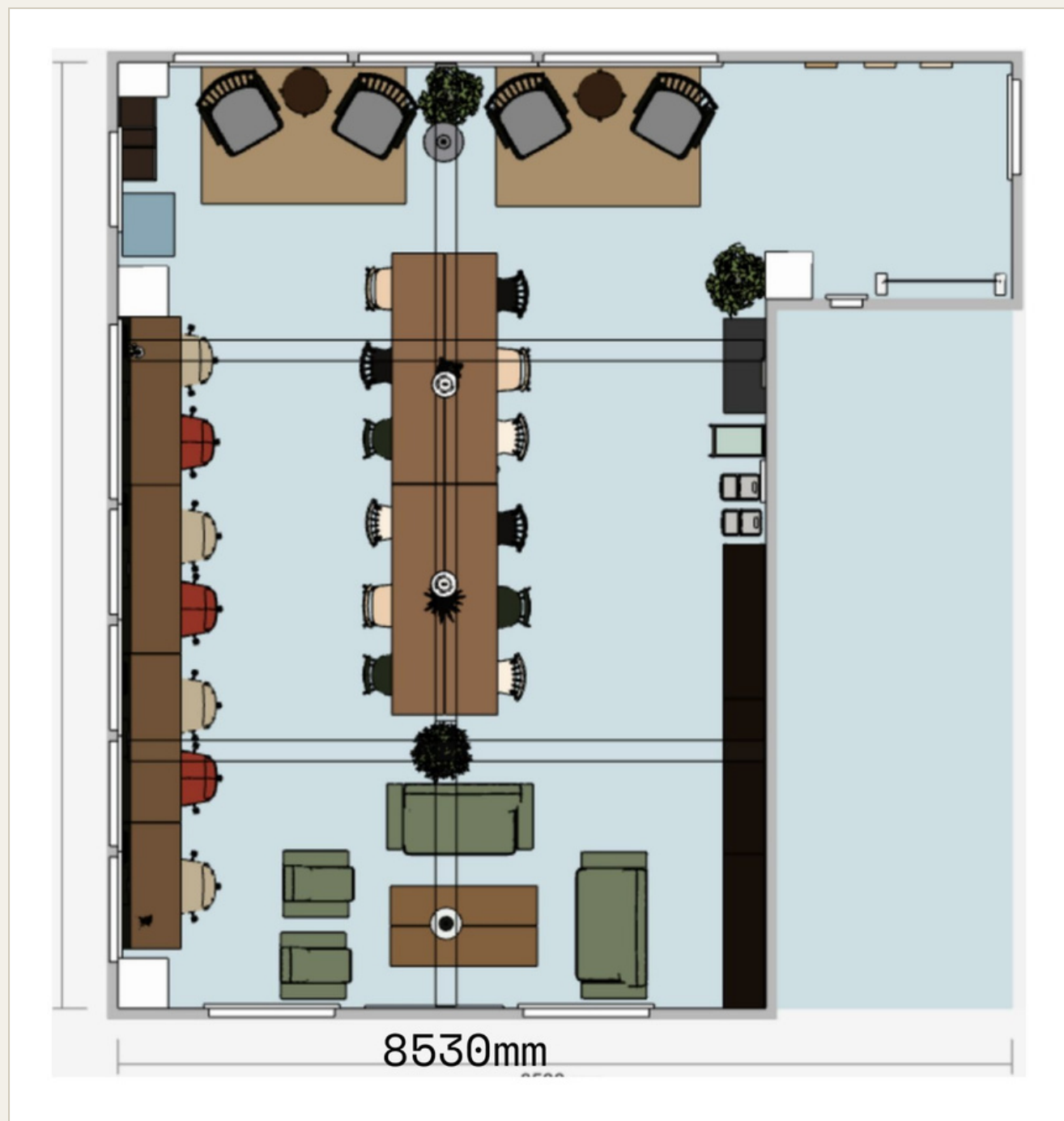
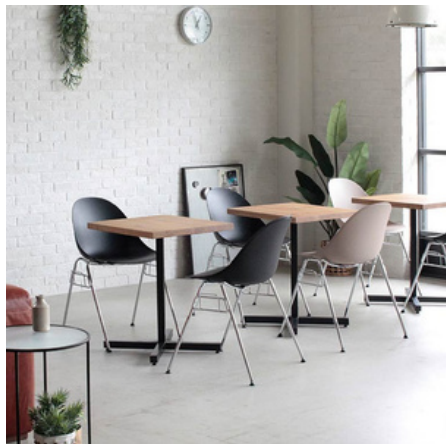


Fig. 06 什器配置図 — Plan A (家具詳細)

室奥行	9,000 mm
室間口	8,530 mm
受付ゾーン奥行	6,450 mm 区画内に設置
ラウンジゾーン	2,350 mm 区画 (室最奥)

家具・マテリアル計画



昇降デスク / チェア



オープンシェルフ



ラウンジソファ / アームチェア



Sサイズ : BK/WH

ペンダント照明 / スツール



Pearl gray
パールグレー



ロールスクリーン Pearl Gray



ロッカー / ワゴン収納

木部はウォールナット系の中間色で統一し、金物・脚部はブラックに揃えることで、什器ごとの出自の違いを目立たせない。張地はグリーン系のコーデュロイで、ラウンジゾーンに温度感を与えている。

完成イメージ | Rendering



Fig. 07 俯瞰パース — 4ゾーンの構成が視覚的に把握できる

俯瞰視点で見ると、既存プランでは一様だった空間が、機能ごとの「島」として明確に分節されているのが分かる。とはいえ、間仕切り壁は一切設けていない。ゾーンの境界は、什器の配置と素材の切り替えのみによって生まれている。

これは、将来的な用途変更（行事の増減、職員体制の変化）に対して、大掛かりな工事なしに再編集できる計画であることを意味する。

共有ワークテーブル | Work Zone

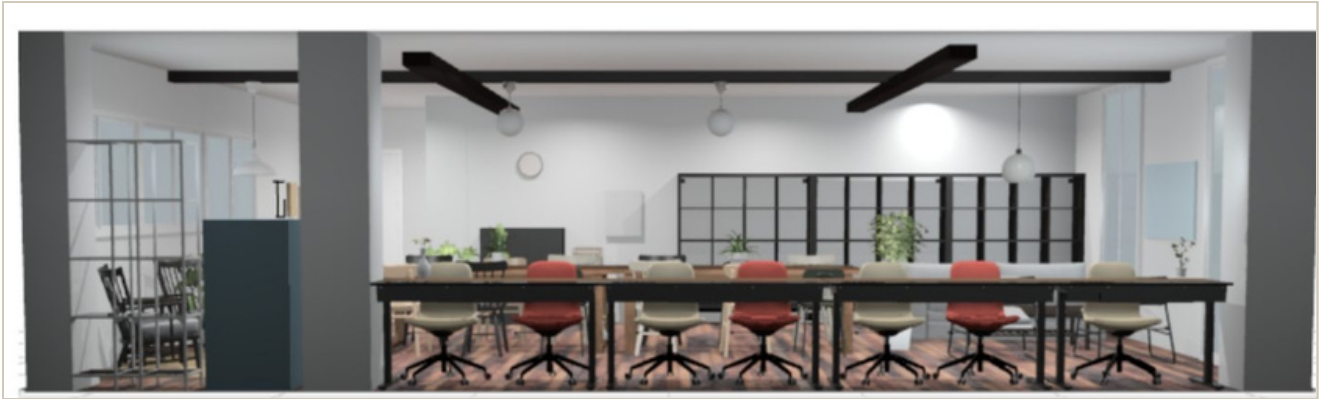


Fig. 08 共有ワークテーブル 断面パース — 収納壁とライン照明

室中央を貫く共有ワークテーブルは、既存の造作カウンターに代わる新しい中心軸である。背面に走る収納壁がすべての什器を受け止め、テーブル面には作業の痕跡だけが残る。

天井のライン照明は、テーブル上の作業面を均一に照らしつつ、什器の輪郭を強調しすぎない、抑制の効いた光として計画した。

入口からの見え方 | Full View

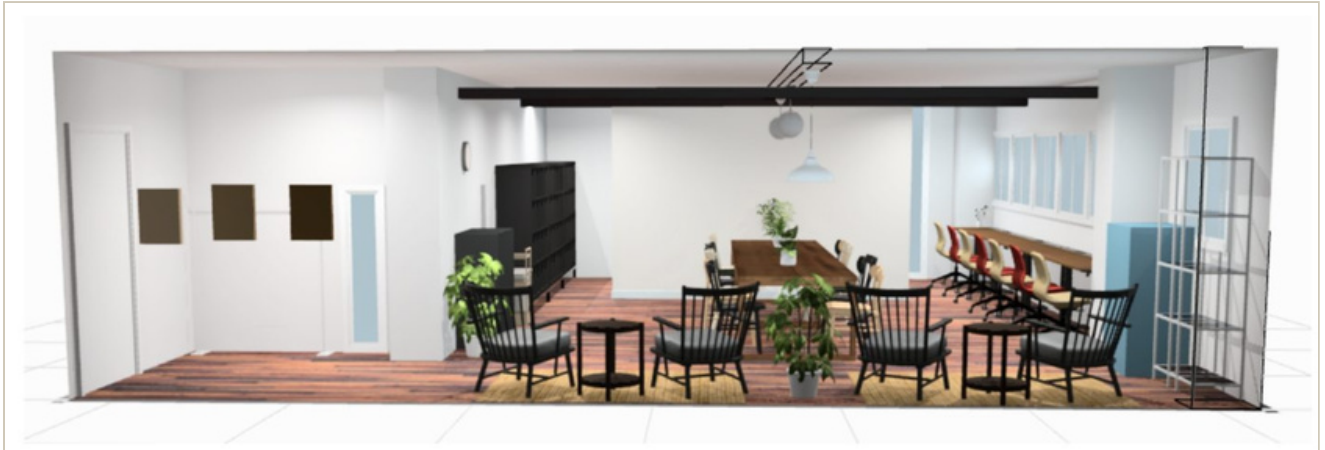


Fig. 09 入口方向 断面パース — ラウンジから収納壁、ワークテーブルまでの連続性

入口に立った時、最初に視界に入るのはラウンジの椅子の背もたれである。事務作業の様子がいきなり目に飛び込む既存の状態から、「迎え入れられる」感覚への転換を意図した構成である。

奥に向かって収納壁、ワークテーブル、窓辺のカウンター席へと視線が連続的に抜け、L字形の平面が持つ奥行きを積極的に活かしている。

改善後に期待される変化

People

職員が作業と対話を場所で切り替えられるようになり、業務中断のストレスが軽減。保護者面談の安心感が向上。

Organization

来訪者が最初に接する場が整うことで、園全体の印象・信頼感が向上。採用面接や見学時の第一印象にも波及する。

Environment

機能ごとのゾーンが確立し、収納・視線・動線の課題が構造的に解消。将来の用途変更にも対応できる余白を持つ。

— REFERENCE — 他施設における導入後の実績

−32%

認定こども園A（環境診断導入事例）

+41%

介護施設B（環境診断導入事例）

98%

幼稚園C（環境診断導入事例）

※上記は☑一STUDIOが手がけた他施設における導入後の実績値であり、本計画の確約値ではない。参考情報として掲載。

実施ロードマップ

Short Term | 0-3ヶ月

ゾーニングと什器の確定

本レポートの計画内容をもとに、家具発注・収納造作の仕様を確定する。休園期間を利用した施工計画を並行して検討。

Mid Term | 3-6ヶ月

施工・什器搬入・運用開始

収納壁の造作、照明・ロールスクリーンの設置、什器の搬入を経て運用を開始。職員向けの運用ルール（動線・収納ゾーンの使い方）を簡潔に共有する。

Long Term | 6ヶ月以降

継続診断・微調整

運用開始後の利用実態を観察し、什器の微調整や運用ルールの見直しを行う。次章「Future Evaluation」に接続する。

環境の完成は、竣工日ではない。運用を通じて調整され続けることで、初めて「その施設の環境」になる。

継続診断という考え方

環境は竣工した瞬間から使われ、使われた瞬間から変化していく。私たちは、竣工をゴールではなく、次の観察の起点と位置づけている。

Post Occupancy Evaluation（POE／運用後評価）として、運用開始から一定期間後に簡易的な再ヒアリングと行動観察を行い、Environment Scoreを再計測する。

再評価時期	運用開始から3ヶ月・12ヶ月を目安に実施
評価方法	簡易ヒアリング／利用状況の観察／Environment Score再測定
フィードバック	什器の微調整、収納ルールの見直し、必要に応じた運用改善提案

診断から計画、実施、そして運用後評価までを一体で扱うことが、□一STUDIOが「建築会社ではない」と自らを定義する理由である。

診断まとめ

コミュニティルームの課題は、老朽化ではなく、計画の不在だった。

本診断を通じて明らかになったのは、素材の古さや設備の劣化以前に、「この部屋が何のための場所か」が一度も定義されてこなかったという構造的な課題だった。

光・動線・収納・視線・対話・集中・居場所——7つの軸で読み解いた現状は、いずれも同じ根に行き着く。すなわち、機能ごとの境界が引かれていないという一点である。

計画では、この境界を「壁」ではなく「ゾーン」として再定義し、開放性を保ったまま、それぞれの機能が本来の役割を果たせる構成へと導いた。クラシカル&ヴィンテージという素材言語は、その構成に時間の厚みと帰属意識を与えるための選択である。

環境を変えることは、内装を新しくすることではない。そこで働き、集う人々が、その場所を通じて少しずつ生きていくための、構造をつくることである。

— GET IN TOUCH

人を変えるのではなく、
人が生きる環境を設計する。

まずは 環境診断 から
ご相談ください。

☑一 STUDIO

palisa LLC | 東京都八王子市

MAIL : masuichistudio@gmail.com

WEB : <https://www.palisa.jp/>